2023年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金論文

(B) 活動・研究助成金 報告論文

「細雪」と抑圧される「ブルジョア」女性

田中　美咲子

キーワード：谷崎潤一郎、「細雪」、ブルジョア、経済主体性、抑圧

1. はじめに

「細雪」[1]は谷崎潤一郎の戦中戦後期に発表された長編小説である。6年の歳月をかけて蒔岡家に寄り添うこの物語は基本的に雪子の結婚相手探しを巡るものだ。物語は冒頭、幸子と妙子が雪子の見合い相手についてその条件を吟味するところからはじまり、夫選びの完結によって幕を閉じる。ラストシーンで雪子の心情は、結婚が決まってこのかた下痢が止まらないという身体の異常についての言及と共に次のように描かれる。

> 小槌屋に仕立てを頼んで置いた色直しの衣裳も、同じ日に出来て届けられたが、雪子はそんなものを見ても、これが婚礼の衣裳でなかったら、と、呟きたくなるのであった。そう云えば、昔幸子が貞之助に嫁ぐ時にも、ちっとも楽しそうな様子なんかせず、妹たちに聞かれても、嬉しいことも何ともないと云って、けふもまた衣えらびに日は暮れぬ嫁ぎゆく身のそゞろ悲しき、と云う歌を書いて示したことがあったのを、図らずも思い浮かべていたが、下痢はとうとうその日も止まらず、汽車に乗ってからもまだ続いていた。
>
> （下巻、37章）

ここで読者が驚くのは幸子の結婚当時の心情が明らかにされることであろう。結婚に消極的な雪子が内心、成婚を苦痛に思うことは意外ではない。一方幸子は、子育てや不妊に悩む面はあれ物語を通じておおよそ貞之助と仲睦まじい夫婦であり、雪子や妙子に対しては一貫して婚姻を支援しようとしてきた人物でもある。その幸子が結婚当時はそれを悲しんでいたという。

この部分の解釈は、ひとまず2通り考えられる。1つは、雪子もいずれは幸子のように幸せになるという展望を示しているという考え方。もう1つは、このようなちゃぶ台返しが行われることは、女性にとって結婚は不幸であるという結論を示しているのだという考え方である。

しかしながら、下痢をし続ける雪子と並置されるこれを前者の意味で受け取るのは困難である。そこで一旦は、「細雪」は望まない結婚に追い込まれる女性たちを描いた物語だったのではないかという仮定が成立する。この仮定は、抑圧された女性像を連想させる。ここで、物語の時代が明治民法におけるそれという意味での家父長制下にあり、また物語の内部においても家長としての辰雄

たなか　みさこ，TANAKA Misako：立教大学文学研究科日本文学専攻博士前期課程

との対立が描かれることとこれが並置されるとき、「細雪」における抑圧の視点からの読解の可能性が用意される。

これまでの先行研究でもそのような女性のありようは検討されてはきたのだが、先行研究には2つの問題がある。1つは、居住指定権の行使の可否が重視され過ぎている点である。東海林奈緒（2013）や宮崎麻子（2019）は辰雄や貞之助が姉妹を操縦しきれないことを、彼女たちが抑圧を免れている、または抑圧に抵抗していることを示す論拠としており、居住指定権を重視している。しかし、辰雄や貞之助が姉妹を操縦しきれていないからといって彼らが姉妹を抑圧していないとは言えない。まして彼ら個人の権力の不十分さが抑圧の不在の証拠にはならない。

二宮厚美（2006）は、「差別」と「支配」という2つの概念を丁寧に区別する必要を論じ、支配が〈AによるBの支配〉という二者関係によるものであるに対し、「差別」は〈CがAに対してBを差別する〉という三極構造であることを指摘している。「細雪」読解においてもこのことは十分に注意する必要がある。つまり、辰雄や貞之助が蒔岡の女性たちを「支配」し得ていないからといって、蒔岡の女性たちが「差別」されていないとは限らない。したがってここでは〈制度が男に対して女を差別〉している可能性を考えなければならない。

先行研究における2つ目の問題は、責任の所在についての認識である。小林珠子（2019）と吉田夏美（2020）はそれぞれ、鶴子と雪子に、本来は蒔岡家を建て直す責任があったという認識を示している。

しかしながら、彼女たちに責任があるという前提はどこから導かれ得るのだろうか。そもそも蒔岡家を継いでいるのは婿養子たる辰雄や貞之助である。蒔岡家の家を守り再興する責務があるとすればそれは彼らにあるのであって、彼女たちはたとえ望んでもその責任を引き受けられない立場にある。彼女たちの責任を問うことは、物語において彼女たちが受けている抑圧を無化する恐れがある。

このような先行研究の課題は、「細雪」における女性のありようについてこれまでとは異なった視点から検討することを要求する。

「細雪」という物語が抑圧の視点から蒔岡の女性たちを読み解く可能性を開いていることはすでに述べたが、その時参考になるのは物語における妙子のありようである。妙子は、辰雄に反抗的な女性で婚姻に関する本家や分家の期待を次々に裏切っていくのだが、明らかに彼女の要求が通っていない点がひとつある。それは、彼女が要求する金銭を辰雄が与えないということだ。辰雄はこの点では妙子に対する権力を有している。このことはこれまでの論において「細雪」の女性の抑圧を検討する際、経済的な視点の検討が不十分であった可能性を示唆する。

これまで「細雪」読解において経済的な視点を強く持っていたのは研究段階以前の、同時代評時点である。

そこで本稿では、第1に同時代評を分析する。裕福さに関わる同時代言説の中で同時代評を検証し、同時代評によってどのような／どのように「細雪」読解が立ち上げられたのかを検討することによって、「細雪」の抑圧を経済的な視点で検討する補助線を引く。

そのうえで、第2に「細雪」そのものの読解を通して、「細雪」と女性の抑圧の関係を記述していく。このことは当時の問題を明らかにするだけでなく、現代に続くジェンダー問題にも援用できる可能性を秘めている。これまで限られた権力関係しか見られなかったところをつぶさに観察することは、必然的に個人の間だけでなく社会構造に組み込まれた抑圧への注視を要求するからだ。加えて、「細雪」の女性が裕福であることは、そこに存する抑圧を考察することが同時に、プロレタリア女性と区別され時にその敵と見なされて被抑圧者の枠から除外される「ブルジョア」女性の抑圧の問題に光を照らすことにもなることを意味する。

次に、同時代言説の中で「細雪」同時代評を検

表1 〈同時代評〉選定基準

a.	「広告」や本文抜粋、要約は集計に入れなかった。ただし、「小説細雪と京の花」（本間［1949］）については、本文中に「「細雪」の広告である」という文言が含まれるが、内容が評言として機能していると判断し、集計に入れた。
b.	「細雪」という言葉を用いている短歌、句の類が複数確認されたが、谷崎の「細雪」に関わるものであるかどうかの判断がつかないためこれらは集計に入れなかった。ただし、「細雪読後感」との表記がある「潮ざゐ」（喜谷［1948］）のみ算入した。
c.	一般には同時代評とされない論文形式の言説が複数確認されたが、同時代に「細雪」を評価したものとして、本研究では〈同時代評〉として算入した。
d.	1950年には映画版「細雪」の公開に伴って映画「細雪」の評論が登場するが、小説についての言及がはっきりと確認できないものは算入しなかった。

討していく。

2.〈同時代評〉における問題の無化

1｜〈同時代評〉選定と集計

今回取扱う資料は、1943年から1950年の期間を対象に、次の3つの資料検索ツールを利用してリストアップされたものである。以下の文章では、資料の入手を収集、〈同時代評〉リストへの算入を集計という言葉で区別している。

①『文藝時評大系』（中島・曾根・池内・宗像2010以下、『大系』）昭和篇I及びIIの索引篇
②「国立国会図書館オンライン」（https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/）[2]
③「20世紀メディア情報データベース」（http://20thdb.jp/）

上記の検索ツールを利用し、『大系』所収のものは『大系』掲載資料、②③で提示された資料は国立国会図書館の資料で確認した。ただし、資料間の重複や対象期間内に書籍に所収されたものに関しては集計の際にいずれか1点のみを採用した。

資料収集の手順として、まず『大系』資料を確認し、1950年に議論が落ち着きを見せたことを確認し、1943年から1950年末までという期間を設定した。そのうえで②③のツールを使用しリストを作成した[3]。

②③での探索はキーワード検索となるため、収集の結果目的以外の資料が多数含まれた。これらについて、表1に示す基準で本研究における〈同時代評〉として集計した。

以上の操作を経て、105件の文献が集計された。以上の操作には人為的な作業が多く含まれるため、判断の妥当性が完全に担保されるとは言えない。ただし、本研究の目的には十分な資料が収集できたものと考えている。集計、引用に関する責任は筆者に帰すものであり、理解を願いたい。

以上が、本論文が扱う〈同時代評〉[4]である。これらを検討したところ、以下のような特徴が見出せた。

〈同時代評〉のうち、先行研究では注目された戦争との関係でこれを賞賛している論は、戦直後の1947年までに発表された4件ほどと笹尾佳代（2015）も引いている瀬沼茂樹（1949）程度で、これを全体的な傾向とすることはできなかった。

その一方で、共通性の高い話題といえるのは「細雪」の裕福さについてであった。今回集計された資料の内、直接的に裕福さについて何らかの言及を行なっていると確認できるものに限っても、全体の約41％に相当する44件に上った。このうち、裕福さを示す用語として「ブルジョア」を使用するものは23件で最も多く、次いで「有閑」が12件、他に「中流」や「中産」などがある[5]。なお、「細雪」に否定的な評価を下すものは11件

認められたが、そのうち「細雪」の経済的な裕福さやそれを指す概念を批判の根拠に用いているものは9件あった。

同時代評においては「細雪」の裕福さをどう見るかという問題が議論の基盤になっていたとみられる。

2 | 同時代言説収集と比較

以上の結果を踏まえ次に、同時代の「細雪」〈同時代評〉とは無関係の言説と、「細雪」〈同時代評〉を比較する。そのことで、「細雪」〈同時代評〉における裕福さへの言及という共通点にどのような意味を見出すべきか／あるいは意味はまったくないのか検証したい。

同時代言説として、「細雪」〈同時代評〉で使用頻度の高かった「ブルジョア」と「有閑」に関わる以下の資料を選定した。対象期間は十年単位の変動を見るため、起点を1930年にし、終点を1950年とした。

①既出『大系』索引篇の事項索引の見出し語において「ブルジョア」が含まれる項
②「朝日新聞クロスサーチ」(https://xsearch.asahi.com/)のキーワード検索
③「ヨミダス歴史館」(https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/)のキーワード検索

以上のうち、②③のキーワードはいずれも「ブルジョア or ぶるじょあ or ブルジョワ or ぶるじょわ」と、「有閑」を対象とした。①は文芸時評における動向の把握のため、②③は一般的な使用法の把握のために利用した。

比較サンプルとして大手新聞を対象とすることの問題点は免れがたくある。特にこの時期の新聞上では検閲等の制約がある事も考えられ、新聞上での用語使用が資料としての適性を欠いている可能性は否定できない。しかしながら、そのことはむしろ大手新聞上でも論じ得たことの像を大まかにでもつかむ資料としての価値を見出せると言い換えることもできる。加えて本稿でこれらの資料を利用する目的は傾向比較であることに鑑み、さらには『大系』の参照によってある程度文壇領域の特殊性をカバーするという条件下において、本稿ではひとつの指標として大手新聞を用いることにする。

ここで収集した資料と「細雪」〈同時代評〉を比較した結果、次の2点が判明した。

第1に、「細雪」〈同時代評〉における裕福さへの言及は同時代的には例外的なものである。この点からも「細雪」〈同時代評〉における裕福さへの言及の意味を検証する必要があるということが明らかになった。

「ブルジョア」はプロレタリア文学運動の弱体化とともに使用頻度が下がり、1940年以降戦時中は殆ど使用例がなくなる。「朝日新聞」における1940年以降の用例はフランス史についての論である「パリ・文化の運命(2)」(朝日新聞1940年6月17日朝刊)を除いてすべてタイトルに「ブルジョア」が含まれる作品の広告や報告であり、論者が「ブルジョア」という語を用いたり、「ブルジョア」について何らかの議論を加えたりするものではない。「読売新聞」では「海外豆ニュース」(1940年3月12日夕刊)以降1946年まで「ブルジョア」は一切使用されない。「ブルジョア」という語を使用する記事が再び増加に転じるのは戦後になってからだが、戦前の「ブルジョア」の使用例が文芸欄に集中しているのに対し戦後は政党選びの文脈に議論の場が移っているという変化が認められ、両新聞では文学の問題としての「ブルジョア」の有効性は戦前までに衰退したといえる。戦時中に「ブルジョア」が使われなくなるという状況は文芸時評においても同様であり、たとえば『大系』における索引の対象語として「ブルジョア」を含む語彙の使用は『大系』昭和篇Ⅰ第14巻にあたる1939年を最後に途絶えている。1940年から終戦までの間にわずか一度の用例は「細雪」同時代評のひとつに数えられる花田清輝(1943)のみである。

ここで確認する必要があるのは「細雪」に関する議論の外部では「ブルジョア」についての議論

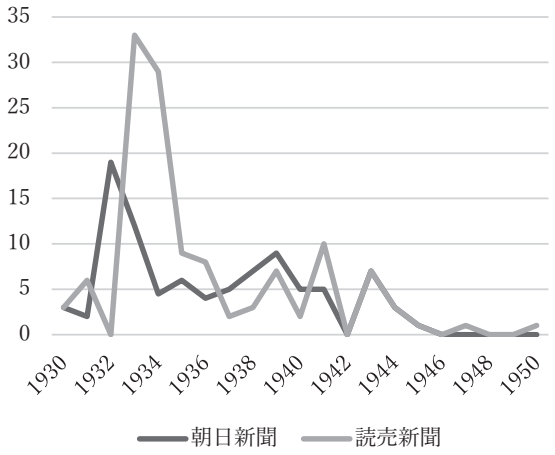

図1　「朝日新聞」と「読売新聞」における「有閑」使用記事件数の変移

が下火になっていたということである。「細雪」批評においては、その外部において時局により言及を制限せざるを得なかった「ブルジョア」という語彙を用いた議論が温存され、裕福さと階級の問題が物語の主題として受け取られ続けた。

次の図1は、「朝日新聞」と「読売新聞」の当該期間の記事における「有閑」の使用状況の変遷である。

「ブルジョア」の使用状況と比較して際立った差異といえるのは、「有閑」の使用には2つのピークがあり、それが「ブルジョア」の問題が下火になった1932年以降の数年と、戦時中に存在したことである。両者は語意の範囲にずれがあるため使用状況の相関関係を断言することは難しい。しかしながら、少なくとも「ブルジョア」を問題にできない時期に「有閑」は問題にできたということはいえる。

以上のように、「細雪」批評は同時代言説のムーブメントとは独立して繰り広げられ、「細雪」という作品のほうに論調の原因があったことが推察できる。したがって以上の分析結果は、「細雪〈同時代評〉における「ブルジョア」や「有閑」という語を用いた論展開の多さについて注目することを支持するものと考える。

第2に、「細雪」〈同時代評〉と同時代言説では、語の用いられ方が異なっていた。

それは、「細雪」〈同時代評〉以外の場で生じている戦中戦後の「ブルジョア」と「有閑」の使用方法の偏りと「細雪」〈同時代評〉の言語感覚が必ずしも一致しないということである。

「ブルジョア」と「有閑」には使用時期のほかに語の対象とする性別の点で違いが認められる。

「有閑」の使用用例を見ると、その使用は女性に係るかたちに片寄っている。今回分析した「朝日新聞」の資料では、「有閑」が女性を説明して使われる割合は60％（「有閑随筆」という書籍に関連する件数を除く場合は65％）だった。男女に使われる割合は12％、男性に使われる割合は5％であり、偏りは大きいと言える。

これに対して「ブルジョア」を使う記事においては対象の性別はほとんどの場合明示されない。だが、このことは「ブルジョア」が男女双方を指示する用語であることを意味しない。なぜなら、同時代状況において「プロレタリア」（＝労働者）である女性は想定されても、資本家の女性はほとんど想定されなかったからである。たとえば「財産家の奥さん（中略）アフリカのブルジョア夫人！」（読売新聞1931年11月3日朝刊）という言い方や、「海外豆ニュース」（読売新聞1940年3月12日夕刊）の「市の有力家のブルジョア夫人」

という言い回しが「ブルジョア」の概念を端的に表している。

時代の通念としても実態としても、資本を有するのは基本的に男性である。「ブルジョア」などの階級を分ける言葉はその資本に対する状況に応じて男性を階級的に弁別しているのである。女性は「ブルジョア」な男性の「夫人」、妻であって、女性自身が「ブルジョア」なのではない。これはまだ経済世界に参入していないと考えられる子どもも同じで、「ブルジョア子弟の大金拐帯頻出す資金局に『大口拐帯係』 その総金額十二三万円に達す」(読売新聞1933年1月13日号外)のような場合、「ブルジョア子弟」という表現は「ブルジョアの子弟」という意味を含みこむ。記事の言葉でいえば、「ブルジョア子弟」=「社会的に有名な名流家庭の子女」(傍点引用者)であり、女子ども自身は「ブルジョア」ではない。

ところが、「細雪」〈同時代評〉にはそのような世間一般の使用法とは様相を異にしたものが含まれる。「典型的なブルジョア女性」(瀬沼 1949)、「長姉鶴子は、極めて日本流の、しかも大阪のブルジョア娘」(辰野 1949)、「大阪を中心とする京阪神地方のブルジョア的女性」(成瀬 1949)、「この女のブルジョアジイ」(日夏 1950)、「没落しかけているブルジョアの女の世界」(熊谷・辰野・長谷川 1947)などの表現では、「ブルジョア」が女性に係っており、女性が経済主体でないことが表出してこない。

特に問題なのは、同時代的に影響力が大きかった評論が女性と「ブルジョア」を結び付けてしまったことである。

3 | 長谷川如是閑論とその展開

「細雪」〈同時代評〉の特徴として、言説同士の引用がほとんど見られないことが挙げられるが、唯一複数の論者に引用され定着した論として対談「忘れ得ぬことども」(熊谷・辰野・長谷川 1947)があった。ここで長谷川は「あれは現代の源氏物語ですよ。貴族文学に対して、立派なブルジョア文学だね、平安時代に源氏物語が遣ったように、『細雪』は、ブルジョア時代の一つのモニュメントとして残るべきものだね」と発言する。長谷川はここでの発言に手ごたえを得たのか、谷崎本人の前でも同様の発言をしている(谷崎・長谷川 1948)。この「ブルジョア」、「モニュメント」、「源氏物語」という組み合わせは当時の言論空間を端的に凝縮したものだった。

「細雪」〈同時代評〉では、戦後になって戦前における「ブルジョア」階級が崩壊してしまったことを想起し、それを懐かしむ論が発生した。このことを象徴的に示すのが長谷川論の提示した「細雪」の「モニュメント」性であった。

他方、物語時間から1930年代の階級区分を連想した論者たちは、1930年代のプロレタリア文学運動で盛んに言われていた、貴族時代から市民時代、そして労働者時代へという進歩史観を持ち出して、谷崎が翻訳した「源氏物語」が貴族時代を描いたものであるに対し「細雪」は「市民時代」(=ブルジョア時代)を描いたものであって、どちらも失われた時代を代表するものであるという構図をしばしば用いた(瀬沼 1949;浅見 1949;日向 1950)。

問題は、辰野、熊谷との対談においてこの絶妙なキャッチコピーが出る前の部分で長谷川が、「没落しかけているブルジョアの女の世界が実によく描きだされている」と発言していることである。ここでは「ブルジョア時代のモニュメント」を描くことと「ブルジョアの女」を描くことが結びついてしまっている。

この長谷川論のイメージと、「細雪」を批判する論のイメージは相性がいい。たとえば「出て来る人間が金持で癪にさわるし、文章が丹念すぎて嫌」(郡山 1947)という論では「金持」なのは女性であるというニュアンスの表現となっている。

他方、山本健吾(1950)は「作者が幸子を通してこの作品に歌い出してゐるのは、現世的な享楽の満足感だ」として「何といふいやらしさ!現実の豊富さに覆はれた理想の、何といふみすぼらしい姿!」と批難する。「彼女(引用者注:幸子)の思念の中には、家の格式と個人の幸福以外の問

題が現れることはない。この封建的なものとブゥルジョア的なものと混淆したエゴイズムを、作者自身認容」しておりそれは「時代の良識からは遠い」という彼の評価は、「ブルジョア」な女としての蒔岡の姉妹の思想を批判するものとして働いている。

このようなあり方は、同時代の「ブルジョア」「有閑」観に照らしたとき、論者の意図に関わらず、蒔岡の女性たちを経済主体としてみなす振る舞いとして機能してしまう可能性が指摘できる。その延長上に、「細雪」〈同時代評〉に頻出した、「細雪」の女性を批難する言葉はある。たとえば、香川明（1949）は雪子を「結婚という自分の運命に対して、（中略）自己の明確な見解というものを発表せず、常に周囲まかせの女性である」と評し「こういう女性が多いからこそ、女性の人間的目ざめが、とくに強調されなければならない」と訴えている。辰野隆（1949）は「日本の女性には未だ近代的の性格らしい性格が形成されぬ」と言う。

髙島屋の社内報では「雪子は三十をすぎても電話の応対一つ出来ないほど内気で消極的な娘、それに対し妙子は自活能力を持つ半面、自由奔放な恋愛によって一家の不名誉をかえりみない。読者は作中いづれの女性からもその生活からも、何ら現代的意義を見出さないであろう」（S 1949）とされる。瀬沼（1949）は「日本の有閑的なブルジョアの女性生活を描けば、それがまったく家族生活に終始し、社会生活に無縁」となることは当然であるとした上で「彼女らは社交においてさえ社会的ではありえなかった」と指摘し、そのようなものは「細雪」においては男性によってしか発揮されないことを嘆いている。そして「日本的な封建的な」雪子は「読者にとっては少しも魅力のある人物ではない」と言い切る。中谷（1950）も次のように批難している。

> 額に汗して働くとか、働くことの苦しさに泣くとか、そうした経験は一向に語られることがなく（中略）働くことに口をつぐんだ人々が男も女も、応接間に会合し、料理屋に集合して、ただ消費生活に於ける通を振りまわしては気の利いたサロン会話を取交わす。これが日本であったわけではないし、これが日本人の真の姿であったわけでもない。

「細雪」の姿がこうであったわけでもないのだが、「消費生活」ばかりに身を置く蒔岡の女性という理解は興味深い。

一方、彼女たちは男性のあっけらかんとした羨望にさらされもする。「いくらかの金をもって毎日を綺麗に美しくあそんであるという生活ということね。それをたのしみにすることが生活謳歌ということ（中略）あの、『細雪』を読んでみてたのしい夢を見るわけなんだな」（福田・竹井1950）。彼らもまた、彼女たちを「いくらかの金をもって」いる女として見る一群に過ぎない。

4 ｜ 分析をふまえて

以上の分析から分かるように、「細雪」〈同時代評〉には、それが女性を経済主体としてみなすような手つきがある。しかしながら、同時代言説に現れる女性の経済的主体性のなさは決して偏見ではなく事実であり、作品内部の状況からいってもそのとおりである。だが、今までみてきたように、「細雪」〈同時代評〉では妻や未婚の姉妹の帰属が表面上無化され、彼女たちが、彼女たちの属する男と完全に同一視されることで、外面的に経済主体化された上で批難されてしまった。

興味深いのは、「細雪」という女性を中心として物語が展開する小説を読解するために、このような男性ジェンダーの付与が起きたということである。しかもそれが、長谷川のように物語全体を大掴みに捉えて発言している論者と、そのほかの内容を詳細に分析することが目的の論者とで共通していたことも注目に値する。このことは多くの読者が「細雪」を女性主体の物語として読もうとする際に、潜在的に女性登場人物に男性規範を当てはめてしまうという認知のずれの存在を示唆する。このような女性の実態と解釈の不一致

は、先行研究のように雪子や鶴子の責任が追及されてしまう構図にも似た自己責任への追い込みを生む。

しかしながらそのことは却って、自分の人生を自分の意思で生きようとしているにもかかわらず、経済的主体性を持ち得ない女性の実態を浮き彫りにする。ここに立ち上がる女性像が、「細雪」読解の可能性を立ち上げてくる。「細雪」という物語を読み解くためには、経済的主体性の所在が問題になることが、ここでも示唆されるのである。

3. 抑圧が推進力となる物語

1 | 留学できない妙子

先の分析を踏まえてここでは物語で女性たちの経済主体性のなさがどのように機能しているのか論じたい。結論を先取りすると、「細雪」においては経済主体性のなさという抑圧が物語の推進力となっている。

「細雪」冒頭、幸子との会話によって雪子の見合いでは相手の経済状況を重視すべきであると表明する妙子は、他の三姉妹から特殊化されてきた人物である。彼女は他の、封建的で伝統的な価値観に従う姉妹に対し、近代的で奔放とされる（東郷 1985 ほか）。

しかしながら妙子の異色さは、彼女の趣味嗜好や運命といった漠然としたものでは説明できない。

妙子の人生のターニングポイントは、洋裁留学の断念である。ここで啓坊との関係を清算し、職業としては不十分だった手仕事を自活手段として確立するはずだった妙子は、この断念から板倉との関係の開始、啓坊との関係の拗れ、のちの三好との間の子の妊娠、死産、階級転落を伴う結婚へと下り坂を転がり落ちるように加速度的に事態が進展してしまう。

留学の断念は自然災害によるものだと考えられてきたが、テクストの記述は、洪水は象徴的な意味しか持たず、直接的な原因は彼女が女性であったことだと示している。

妙子はもともと自活志向が強く、収入源とはなったが自活手段までは到らなかった人形制作から、さらに実利的な洋裁によって身を立てるという路線変更を計る技術獲得のために洋行を計画していた。しかし、その費用を亡き実父から引き継ぐべき財産に求めようとするとき、彼女は経済構造の男性中心主義の問題にぶつかることになる。

亡父の遺産を引き継いでいるのは辰雄なのである。彼が財産の執行権を握っていることで、亡父の財産はブラックボックス化し、鶴子経由で「別にこいさん（引用者注：妙子のこと）の名義になっているお金」はない（中巻、23章）という返答がもたらされる。この真偽は不明のままだが、辰雄は日頃から雪子と妙子に対する小遣いに差をつけている。辰雄は妙子には収入があることに鑑みての処置というが、その理由が単に好悪によるものであることが幸子に寄り添った語りによって明かされ、それが収入を得る以前からであることも仄めかされる。辰雄の言い分は信用に欠ける。姉妹にとって資金の増減は辰雄の“お気持ち”次第である。

問題は、テクストがこのような妙子の在り方の比較サンプルとして、男性ならば洋行が出来た例を妙子の洋行問題より前に置いていることである。物語内で最初の見合い相手、瀬越は、相続によって多少の金銭を手にすると、無目的にフランスへ行き何の収穫もなく帰朝した人物である。彼の行動は「変わっている」の一言で済んでしまい、そのことで低評価を受けることはなく渡航についても何等意見された様子はない。

しかしながら、妙子は啓坊、貞之助、鶴子らさまざまな方面から口やかましい指図（それらはすべて批判であり拒絶である）を受け、彼女は自らの持てる言葉を総動員して言い訳を繰り返し、しかし最終的には資金を得ることが出来ない。

一方には蒔岡家ほどではない実家の遺産を男だから一人で継ぎ、無目的な洋行に自由に散財でき

た男がいる。瀬越の洋行譚は妙子に向けられる男たちの視線の理不尽さを浮き彫りにするとともに、その原因を作っている制度は何なのかということを明らかにするものである。

彼女の洋行が結果的には自然災害によって破綻することは、従って、象徴的な事象と見るべきである。このとき、社会構造に組み込まれた男性中心主義は女性たちにとってもはや自力では太刀打ちできないものであることが暗示される。

〈同時代評〉の整理とも通ずるが、「たとえ資本家階級出身の男性との結婚によって女性の生活水準が上がることがあっても、その結婚によって彼女がその階級の一員になるわけではない」（デルフィ 1996）。そればかりか蒔岡家の様相が示すのは、たとえ女性が資本家階級の出身だとしても――「細雪」では船場の元大店の出身だとしても――彼女たちはその階級を自ら引き継ぐことができるわけではないということだ。それは辰雄や貞之助といった男性が船場の元大店の娘と結婚することによって得た財産を、そのまま自らの階級を決定づける根拠と出来るのとは対照的である。

以上のように、妙子においては彼女の人生の展開が経済に関する抑圧を形づくる社会構造の影響下にあること、言い換えれば、男性中心主義的な抑圧が妙子の物語の推進力になっている。

2 ｜ 幸子の幻想

「細雪」における問題は資産継承である。蒔岡家の場合、相続は辰雄が、それとは別に分家を立てる際の贈与として貞之助が、それぞれ蒔岡家の先代の財産を継承している。没落した商家とはいえ、分家ではそれで補いをつけて生活をし、本家でも動産の価値が危うくなると心許なく感じるということはそれまではそれを頼れる程度に当てになる資産が残されたということだろう。

先行研究では辰雄や貞之助といった婿選びが船場という設定に相応しくなかったこと、あるいは船場という土地柄を考えれば長女、次女が家を建て直せなかったとしても三女から下にも家業を継ぐ権利があったはずであり、それをしなかった姉妹にも責任があるというような見方がされることがある（吉田 2020ほか）。だが、ここでは、船場で店を続けていく前提での家経営を物語外部の事情から類推するより、物語によりそって事情を見るべきであろう。幸子によれば、先代である亡父の時点ですでに放漫経営がたたって店は傾いていたという。鶴子と幸子に辰雄と貞之助が宛がわれたことは店の経営の逼迫の傍証と見た方が「細雪」の実態に合っている。2人の特徴は船場の店以外に確実な収入源を持っていることである。婿に継がせて立て直す云々の選択肢は、亡父の時点でまだ店が続けられる程度に経営が傾いていなければの話だろう。船場は商業の発達した地域である反面競争が激しく潰れていく店も多かった（香村 1986）。父が辰雄や貞之助を連れて来たということは、その時点で店は実質潰れていたと考えるべきだ。したがって語り手がいうところの辰雄が店を手放してしまったというのは、確かに外形上はそうかもしれないが、これは文字通り受け取るのではなく、そういったミスリードがなされていることが重要だ。したがって、辰雄と貞之助に代替わりした時点で蒔岡家は実態としては商家ではなくそれぞれサラリーマン家庭と士業家庭であり、その現実が幸子や語り手に否定されるのはそこに蒔岡家の持つ幻想があるからだということなる。

妙子が雪子の見合い相手に経済状況を重視する一方、語り手としばしば癒着した状態をとる幸子は門地重視の志向を持つ女性として知られる。幸子は妙子の婚姻を巡る貞之助との論争において何はともあれ船場の生まれであることを理由に啓坊を推し、雪子の結婚相手として華族の出である御牧を喜ぶ。

これらの意見は「細雪」の男たちとは一致せず、夫・貞之助との数少ない対立点にもなっている。先行研究ではこれが家柄の重視ということになっている（小松 2019ほか）が、船場の商家と華族では問題のフェーズが異なり、一貫した論理とは言えない。しかしながら、啓坊と御牧には唯一、ある共通点がある。それは、彼らがその家の継承者

ではない点である。啓坊は船場の貴金属商の三男坊で実家は自らを嫌う兄が継いでおり、御牧は庶子であり、実子の兄がいる。

幸子や語り手はテクストにおいて、事実と反することであろうと執拗に亡父の代からなにがしかを幸子までは引き継げたと主張する。同時に幸子は家の財産は自分にも所有権があると感じている。幸子は夫の財産を幸子から妙子へ渡すことを「あたしかてお小遣いぐらい上げられる」と表現する。自らの稼ぎがあった妙子はともかく、雪子や、他方では鶴子さえ資金提供時に、「あたし」がお金を出せるとは言わない。貞之助と幸子の夫婦関係の性質からか幸子の性格によるものかはわからないが、少なくとも幸子の感覚において我が家の金を渡すという行為は「あたし」を主語にして行える種類のものである。この意味で蒔岡家の財産は、幸子にも所有されているのである。一部分ではあっても、鶴子や雪子と違い資産の所有感覚を持っている幸子は持つ者と持たざる者の両側に足をかけている。この点は他の姉妹と幸子を分ける分水嶺である。

これと先の幻想を重ねると、幸子は亡父からの遺産を貞之助が独占したのではなく、自らも受け継いだのだと感じようとしているらしい。

しかしながら、くどいようだが実態としてはそのような事実はない。そしてこの状態――父から引き継ぐことが出来ないありよう――は、奇しくも啓坊や御牧との共通点になりうる。

啓坊と御牧に共通するのは、彼らには長兄に遺産を引き継ぐべき正当な後継者がおり、みずからは彼らの父の代からの遺産の継承者ではないという点である。それゆえ、啓坊や御牧は父から小遣は貰っていても、このさきの経済的な保証が不確かな状態にある。

幸子が啓坊や御牧を否定するということは、彼らが彼らの父の代からの遺産を引き継ぐことが出来ない人物であるという現実を受け入れることである。幸子は彼らを推薦する時、いつも彼らの背景にある家に価値を置いている。啓坊は船場の家の出身だから、御牧は華族の出身だから良い。この理論において、そこから実体のあるなにかを引き継いだ否かは無視される。出身でさえあればその家の特徴を引き継いでいると見なされるのである。こうすることがもたらす利点は、現実から目を逸らすことでしかない。

啓坊や御牧を否定することは、翻って同じように父の子でありながら父の代からの継承物を持たない自身の現実を認識することと同義である。つまり幸子は啓坊や御牧を肯定したいというより、否定できないのである。

ここでも女性に対する経済的な抑圧は物語の推進力となっている。

しかし、雪子や妙子の問題において彼女の目論見が実を結ぶことは、彼女の状況を改善するのに何等役に立たない。そもそも、幸子には財産の所有権がまったくないのに対し、かの2人は男性だから所有権自体は持っている。現に親が亡くなっていない御牧には財産の分割の可能性が残されている。

雪子や妙子に対する目論見の成功が幸子の役には立たないことは、幸子のもう1つの願望が雪子や妙子の結婚とは基本的に相容れないものであることからも暗示されている。

「細雪」において、幸子は〈生活の定式〉の維持を強く願っており、それを幸福としている。〈生活の定式〉の中心をなす姉妹揃っての花見が維持できなくなるのは、妙子の交際や妊娠、雪子の婚姻によるものである。

もし、幸子が本当に〈生活の定式〉の維持を願うなら、彼女が望むべきは姉妹の不変である。雪子にはこのまま家にいて結婚しないことを、妙子にも同じことを望めば花見は維持され得る。姉妹はしばしば分家に滞在しているが、そのことで本家と多少の軋轢（しかしいつも結局は見逃される）が生じることはあれ、分家が経済的等、種々の理由でなんらかの困りごとを抱えている様子はない。雪子の“嫁ぎたくない”という心情を表すことは許容されるテクストにおいて、幸子が雪子の不変を内心に望んでも問題はあるまい。むろん、時代のことであるから幸子にそれを求めるの

は酷だとしても、であればこそ、このことの意味を考える必要がある。

「細雪」においては、幸子の幻想の維持と彼女の生活上の幸福は両立しない。櫛の歯が欠けるように姉妹を失っていく彼女の、婚姻時の不幸が結末部において雪子に示されるのは、ここまで述べて来た意味でこそ、観取されるのである。

3 ｜ 辰雄に反抗する雪子

ここまで、雪子を取り巻くひとびとの物語が、抑圧によって推進されてきたことをみてきた。それでは、当の雪子はどうだろうか。

これまでみてきた事象についていえば、雪子は妙子に対し幸子と同じ主張を、幸子より強く展開した人物である。雪子も妙子に啓坊を推す。吉田（2020）は、雪子の啓坊へのこだわりは船場へのこだわりだと主張する。そのうえで、雪子にとって船場との靭帯を回復するチャンスであった橋寺との婚姻を逃した原因が電話であることに着目し、「職住分離が呼び込んだ装置」を使いこなせなかったことによる破談とみて、雪子が時代に取り残されるさまを読む。しかしながら、橋寺は静岡出身で船場にはサラリーマンとして勤めているだけである。そもそも店のない蒔岡家が船場とのコネクションによって家を再興できるわけでもない。また、雪子は電話だけではなく対面でも橋寺にそっけない態度をとり、それが破談に影響している。よって電話は原因のひとつでしかなく、また船場への執着という理解では二度にわたる消極的姿勢の説明がつかない。

雪子は常に見合いに積極的ではないが、結婚を拒否しているわけではないのだろうとみられる。実際、雪子は見合いを断ることはしないし、いくつかみえる雪子の心内描写からは婚姻自体には否定的でない部分が読み取れる。しかし宮崎（2019）は、そのような描写の信頼性についてスピヴァク（1998）を援用しながら、「押し付けられる慣習に対して、立場の弱いひとは表面的な同意をしばしば口にしてしまう」が、「それは真の同意とはいえない」と指摘し疑義を提示している。状況に鑑み、もっともな指摘であろう。

一方、宮崎（2019）も吉田（2020）も雪子の思想を家柄重視と捉えているようだが、前述の理由も含めて、雪子が妙子に啓坊を薦める理由は単純には判断できない。雪子の行動原理が船場重視では説明がつかないこと考えれば育ちが理由と決めつけ難く、かといって世間体は啓坊と付き合い続ける方が悪い。幸子は雪子が啓坊の同情者だからというが、雪子がそれほど啓坊を気に入っているという根拠もない。

ただ、この場面で注目すべきは妙子に啓坊を推したことより、雪子が啓坊の現状を本家には知らせるなと命じていることである。ここで啓坊を妙子に推したことは2つの意味で興味深い。その第1は、「細雪」中巻において妙子に板倉より啓坊を勧めたときとここから先に雪子が啓坊を強く勧めるのとでは意味が変わっていくということである。第2は、啓坊を妙子に勧めるという行為が辰雄への反抗として機能しているということである。

中巻の時点において板倉と啓坊を比較していたころは、本家も同意見であり、啓坊にそれほど重大な欠点があったわけではなかった。ところが、啓坊が家の商品を盗んで勘当されたり、妙子と啓坊の間に金銭問題が発覚したりしたあとにまで啓坊にこだわるのは不可解である。幸子さえ、今回ばかりは別れたほうが良いのではと悩む。

しかし妙子に啓坊を勧めることは、辰雄への反発という意味では機能している。「ただ姉ちゃんには話さない方がよい、姉ちゃんに話すと、きっと兄さんに話すに違いないから」（下巻、10章）という台詞には、義兄の強権を嫌う雪子の一貫した態度が現れている。

雪子は、自分が父の死後義兄が持って来た三枝との見合いを断った理由を次のように回想する。

> 自分達は、それまで小さくなっていた義兄が急に威張り出したのに反感を持っていたところへ、兄の権力で無理にあの縁を押し着けようとし、圧迫すれば思い通りになる女だと

云う風に甘く見てかかっている様子なのが、自分は勿論、中姉にも妙子にも癪に触って、三人が同盟した形で義兄を困らせたのであった。（下巻、6章）

雪子は辰雄が「威張り出した」、家督を継いで権力を持ったのが許せなかった。その権力は、女であるがゆえに自分が持ち得なかったものである。雪子の見合いの失敗はここから始まってしまう。裏返して言えば、彼女が反発しなければこの物語は開始もしなければ進展もしない。結果、雪子は老いていき、男性中心主義的な市場における価値を下げていく。蒔岡家の家柄が物語時間内で変化していくわけではないのに、雪子がいわば“売れにくく”なっていくのは雪子が抵抗した分老いていくからである。そのことを読者の眼前に見せつけるために、あのしみは存在する。結婚すれば治るとされるこのしみは、男性中心主義に抵抗する女性につけられたスティグマである。

同じことを妙子の場面にみることは、雪子が船場重視だと考えるより、よほど説得力がある。この場面で辰雄はまたしても強権を発動している。蒔岡家の年忌会を姉妹の意に反して東京で強行しようとしているのである。幸子もこのことには不満を持っている。自分には考えていることがあるのに、内心の反抗を隠し発覚を引きのばす手口は、三枝との縁談を断った手口とまったく同一のものである。雪子の論理とは、辰雄の権力への反発心にある。

経済的な基盤によって権力を握った辰雄への反抗によって雪子の見合いの物語は始まり、同じ理由で雪子は妙子を追い詰めていく。ここでも、男性中心主義的経済抑圧が物語の推進力となっている。

この意味において、物語の終結部で雪子の嫁ぎが、当初からの目的であった経済的側面でなくほとんど虚構である家柄によって決定されたことは、物語世界のルールからの脱落を意味し、この点においてこの結婚は破綻を示しているといえる。それは、それまでに蒔岡家の男たちの望んだ相手を断り断りしてきた雪子へ与えられた、結果である。

4. おわりに

本稿では「細雪」〈同時代評〉、および、「細雪」と女性抑圧を分析してきた。その結果明らかとなった以上のような「細雪」像はどのように評価できるだろうか。

「細雪」に描かれているのは、それでも裕福な女性に対する抑圧である。だが、「細雪」の抑圧構造をその理由で評価しないとすれば、それは問題の隠蔽であり、あらたな抑圧にもなる。

元来、裕福な女性は差別を受けている側の敵と見なされることが多い。牟田和恵（1996）の「近代家族」という概念を一般化する際に必要な分析を説明するなかに次のような言葉がある。「ブルジョワ家庭における暖かさと慎みの象徴としての妻＝母と、家事使用人など望むべくもない自らが家事労働者化した妻＝母とでは同じく性別役割分業に基いてはいても意味は同じではない」。蒔岡家の女性たちはここでいう「ブルジョワ家庭」の側に算入されるだろう。このように弁別された女たちの間には分断が生じやすい[6]。

堀川祐里（2022）によれば、「細雪」発表同時代である戦時には働く女性の中で「女女格差」が生れ、それが男女同一賃金を求める動きを抑制するために都合よく強調された。すでに「稼得の必要性から労働を」おこなっていた女性と、「中流以上」の家庭に属し「勤労報国隊や女性挺身隊」として労働現場へ参入した女性の間には軋轢があり、不満が男女平等促進へ向かわないようにそれが煽られたのである。デルフィ（1996）が「女性は夫の階級に属するものとされているため（中略）ブルジョア男性の妻は反資本制闘争の敵と見なされる」と指摘する構造と相同であるところのこのような現象のもとでは、ブルジョア女性の抑圧は無化される。

プロレタリア女性や世の中への抗議の声をあげる女性たちに比べて、豊かに暮らし抵抗の必要も自覚していない状況はその環境の恵まれている程度を示しているともいえ、だからこそ戦時に生れた既労働者と女子挺身隊員のあいだに起きたような軋轢、分断もそこに由来してくる。ところが、ブルジョア女性は、恵まれているからといって抑圧されていないわけではない。したがって、いかにも抑圧されて見える人びとには光が当たり、彼女たちの抑圧は無化されるという逆の差別が発生してくる。

「細雪」は、そのような無化されがちな抑圧を描く作品である。むしろ私たちは、そこに描かれた家庭がプロレタリア階級ではないからこそ、経済的には恵まれているはずのそこにどのような抑圧が存在し、そこで如何に社会が男性に対し女性を差別し、経済的な制度が男性中心主義的で、抑圧を受けた女性が歪められてしまうかをまざまざと知らされる。「細雪」は、ブルジョアとプロレタリアという区別によって分断される女性の、光の当たらないところに光をあて、橋を架ける可能性を秘めている。私たちはプロレタリア女性を読んでその抑圧と抵抗を解き明かすだけでなく、ブルジョア女性の抑圧を明らかにする必要がある。「細雪」の幸子は、抑圧されているがゆえに妙子を抑圧してしまう。抑圧の再生産に女性が加担してしまうとき、そこに抑圧があるのではないかと、「細雪」は物語の外へ開かれていく。男たち個々人が弱弱しくとも、制度や文化に男性中心主義が組み込まれている限り、意図に関わらず抑圧は起ってしまう。ブルジョア女性の問題は、すべての女性にとっての問題であり、もちろん男性の問題でもある。そしてそれはこの時代の問題であり、当然現代の問題でもある。

本稿での指摘は同時代のイメージ形成と、作品のストーリー構築の分析に重点を置くものとなった。その意味で本稿の議論は以上のような抑圧に光を当てるものではあるが、一方で、「細雪」の問題は抑圧を無化されるありようとは裏腹に登場人物の女性、特に幸子の饒舌さでもある。彼女たちは自らに降りかかる抑圧とは全く別の問題にばかり口を開く。このように彼女たちが決してサバルタンではないことは、谷崎作品における女性を考えていく上でも重要な論点であろう。今後の課題としたい。

注

1　初出、初刊は上中下巻それぞれ以下の通りである。上巻：「中央公論」（1943年1月、3月）『細雪　上巻』（1944年7月、私家版）『細雪　上巻』（1946年6月、中央公論社）／中巻：『細雪　中巻』（1947年2月、中央公論社）／下巻：「婦人公論」（1947年3月～1948年10月）『細雪下巻』（1948年12月、中央公論社）。本稿では底本として、『谷崎潤一郎全集』19巻および20巻（2015年、中央公論社）を用い、表記を一部変更した。引用の際は、末尾に巻と章を記載する。なお以降の他引用でも旧字などの表記を適宜変更している。

2　現在は別のシステム（「国立国会図書館サーチ」https://ndlsearch.ndl.go.jp/）に移行している。

3　ただし本稿は資料探索を第一目的とするものではないため、未所蔵もしくは該当巻に該当資料が不在のものはそれ以上探索していない。

4　本稿における〈同時代評〉の概念は資料調査の性質上、一般に言う「同時代評」とは性質を異にする。したがって本稿では山括弧つきの〈同時代評〉という概念を設定し、表記を一般的なそれと区別している。

5　これらの語を「裕福さ」として纏めてしまうことは危険であるが、同時代の言説においてそれぞれの意味区分が明確でなく論者個々人によって指示する対象が違うため、本論ではこれらをある程度の指標としてのみ使用しあえて詳細な分類を行っていない。これに伴い、論のなかでも意味の分析を要する用い方は避けている。

6　ただし牟田の目論見は、そのように一様ではない女性をどのように一般化するかというものであり、牟田論がこのような区別を行っているわけではない。

文献

浅見淵（1949）「細雪の世界」『風説』3（5）: 70-76
S（1949）「貸出文庫：読書の後」『高風』23: 11
香川明（1947）「谷崎潤一郎の描く女性」『美貌』4月特大号: 16-17
香村菊雄（1986）『船場ものがたり』創元社
喜谷六花（1948）「潮ざゐ」『海紅　俳句雑誌』361: 15-23
熊谷守一・辰野隆・長谷川如是閑（1947）「忘れ得ぬことども」『週刊朝日』51（21）: 17-21
小林珠子（2019）「谷崎潤一郎『細雪』論――『家運の挽回』を断念する鶴子――」『愛知淑徳大学国語国文』（42）: 91-

103
笹尾佳代（2016）「事件としての『細雪』」『谷崎潤一郎読本』五味渕典嗣・日高佳紀編著、翰林書房
Ch. デルフィ＝井上たか子・加藤康子・杉藤雅子訳（1996）『なにが女性の主要な敵なのか』勁草書房
G.C. スピヴァク＝上村忠男訳（1998）『サバルタンは語ることができるか』みすず書房
東海林奈緒（2013）「姉妹を眼差す男達――谷崎潤一郎『細雪』論」『語文論叢』（28）:31-45
瀬沼茂樹（1949）「谷崎潤一郎著『細雪』」『書評』4（4）: 26-32
竹井諒・福田恆存（1950）「『細雪』と映画」『書物』（1）: 41-43
辰野隆（1949）「朝日賞受賞作：谷崎潤一郎原作：小説細雪：女の匂い」『週刊朝日』春季増刊号: 57-61
谷崎潤一郎・長谷川如是閑（1948）「対談：女性を描くことども：源氏物語と細雪」『婦人朝日』3（2）: 26-30
花田清輝（1943）「文藝時評　パルトロオの歌」『現代文学』
東郷克美（1985）「『細雪』試論――妙子の物語あるいは病気の意味――」『日本文学』34（2）: 71-79
中谷博（1950）「『細雪』に描かれた四人の女性」『婦人の世紀』（12）: 144-153
成瀬無極（1949）「『ブッデンブロオグ一家』と『細雪』」『いずみ』1（6）: 4-7
二宮厚美（2006）『ジェンダー平等の経済学』新日本出版社
日夏耿之介（1950）「『細雪』上巻細評、『細雪』中巻細評、『細雪』下巻細評」『谷崎文学』朝日新聞社
堀川祐里（2022）『戦時期日本の働く女たち』晃洋書房
本間富次（1949）「小説細雪と京の花」『上毛警友』4（6）: 29-31
宮崎麻子（2019）「四人姉妹と五人姉妹を描き分ける近代文学の物語」『言語文化共同研究プロジェクト2018』21-36
牟田和恵（1996）『戦略としての家族』新曜社
山本健吉（1950）「『細雪』の褒貶」『群像』5（11）: 52-60
吉田夏美（2020）「谷崎潤一郎『細雪』論：雪子の〈結婚〉」『国語と国文学』97（4）: 52-68

なお、論文中参照のウェブサイトの最終閲覧日はいずれも2024年1月7日。